

# 展覧会をもっと楽しむには



『DOMANI・明日展2005』の会場

**普**段楽しんでらっしゃる方や、そんなこと教えてもらわなくても、という方には必要ないのですが、「展覧会はくたびれちゃって」とか「最初は良いけど、観てるうちに分かんなくなってしまう」という方には、楽しむためのちょっとしたヒントをお伝えしたいのです。

会場に入って、どこからどのようにご覧になりますか。「まず挨拶パネルを読んで、最初の作品を観て、キャプションを読んで、次の作品へ」という方、大変おつかれさまです。展覧会は喩えていうなら本のようなもので、最初から一字一句を追ってじっくり読むこともできるし、斜め読みのようにざっと印象をつかむこともできるのです。展覧会にもテーマとか、物語のようなストーリーといったものがあるので、それをつかむと楽に観られるようになります。

展示室は、たいていいくつかの部屋からなっています。展覧会会場で、個々の作品だけを追おうとする方が多いのですが、実はその作品の置かれた部屋（空間）を観ることがとても大切なのです。

**展**示室の空間というのは、均質な箱ではなく、その中にオーダー（階層や序列とでも言いましょうか）があります。あなたが入口から正方形の部屋に入っていったとしましょう。まずどこに目がいきますか。向かっている正面の壁ではないでしょうか。次いで両側面の壁、あなたの入ってきたドアのある壁に対する注意は後回しでしょう。作品を展示する側はそのことに注目します。その部屋に展示するべき作品の中で、もっとも重要な、ポイントとなる作品を目に付く正面の壁に掛ければ、部屋に入ったときに自然にその作品に目が行くのではないのでしょうか。左右の壁にはそれに準ずる、あるいはそれを引き立てる作品を、そこからはずれる作品を背後の壁に置くでしょう。入口近くにある最初の作品が、重要な作品

というわけではないのです。

ですから部屋ぜんたいを観たときに、自然と眼に入る作品が重要な作品ということになります。他の作品はそれに協調して、ひとつの部屋の雰囲気を作りあげます。作品だけを注視するのではなく、部屋として観るようにすると、自然にそれぞれの作品の意味が見えるようになります。個々の作品でなく、部屋の空気を読むといえましょうか。作品は並んでいる順に観なければならないというものではありません。部屋をざっとつかめば、個々の部屋の雰囲気 of 総和が、展覧会全体の印象ということになります。展覧会が「分からない」というのは、全体像がつかめていないということなのです。

**そ**れでも馴染めない方のために、奥の手をご紹介します。展覧会を観るときに、一点一点に注意を払わずに、部屋の感じを眺めながら、まずおしまいで歩いてしまうことです。会場を一巡してから、最初に戻って気に入った作品だけを見直す。意外な作品に出会う驚きは減じてしまいましたが、最初に全体像をつかむことで、展覧会を観るのがとても楽になります。余裕をもって観られるようになれば、もっと展覧会が楽しくなることうけあい

文化部芸術文化課  
芸術文化調査官

野口玲一

